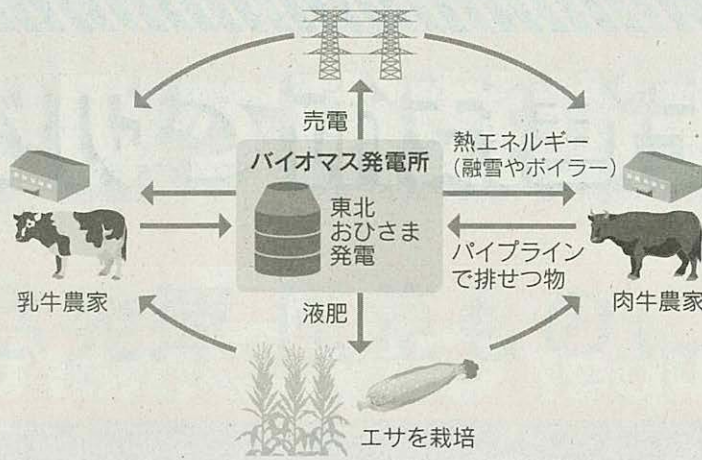


東北おひさま発電（山形県長井市）は同県飯豊町にバイオマス発電所を新設する。隣接地の畜産農家の牛が出す排せつ物をガスに変え、電気と熱を得る。排せつ物はパイプラインで運び処理するため、臭いがほとんど出ない。発電所に併せて飯豊町は隣接地に畜産団地を作り、米沢牛の一貫生産拠点にする。一連の事業は近く着工、2020年5月の稼働を目指す。

牛の排せつ物で バイオマス発電

投資額は約10億円で、出力は500キロワット。北海道で実績のある土谷畜産農家の隣接地に設けるオンサイト型では国内の発電設備を導入するでも有数の規模になると

循環型農業につながるバイオマス発電



東北おひさま発電 山形に施設 臭い出さず、畜産振興



いう。東北電力に売却して年間1億5000万円の収入を見込む。

バイオマス発電だけでなく、畜産振興にもつながる仕組みを作るのが大きな特徴だ。飯豊町は米沢牛の4割を生産するが排せつ物処理に多額の費用がかかるうえ、臭いに対する近隣からの苦情もあり、需要はあっても規模拡大が難しかった。

東北おひさま発電のバイオマス発電では、隣接する畜産農家がパイプラインで自動的に排せつ物を搬出する設備を導入し発電所で処理する。タンクの排せつ物は微生物を使ったマイクロナノバブル技術で臭いを出さないようにするなどして課題改善につなげる。

飯豊町は隣接地に畜産

東北おひさま発電が導入するバイオマス発電施設（北海道の畜産農家の事例）

団地を作り、3軒の農家に造成地を販売して、130頭規模の米沢牛を新たに肥育してもらう。9000万円をかけて7月から造成を始め、来春の事業開始を目指す。繁殖段階から一貫生産すること、「飯豊町で生まれ育った米沢牛」を新たなブランドにする。

北海道では酪農家の隣地にバイオマス発電所を作る事例が相次いでいるが、排せつ物の水分が少ない肉牛では珍しい。飯豊町の発電設備は隣地にある酪農家の乳牛の排せつ物もパイプラインで運ぶことで、肉牛・乳牛いずれにも対応できるようにする。熱は融雪やボイラーに利用、処理の過程で出る液肥は牛のエサになるデントコーンの栽培に使い、循環型農業を徹底する。

東北おひさま発電は飯豊町出身で野村証券副社長などを務めた後藤博信社長が帰郷後の13年に設立した。太陽光発電や小水力発電を手掛けており今後は畜産が盛んな他の地域にも循環型農業につながるバイオマス発電の導入を働きかける。